

★令和元年度宮城県女医会定時総会報告

日時：令和元年7月7日（日） 15:00～19:30

場所：仙台国際ホテル

総会議事は、議長に高橋克子会員が選出され執り行われました。引き続き第29回宮城県女医会研究助成金授与式があり、東北大学大学院呼吸器内科学分野 田中 里江先生、宮城県南中核病院循環器内科主任部長 富岡智子先生のお二人の先生に授与いたしました。また例年通り東北大学病院病後児保育室「星の子ルーム」へ寄付金を授与いたしました。

特別講演

演題：「ご縁をたいせつに～随時随所無不落～」

講師：東北大学副学長 大隅 典子先生

本年は東北大学で女性として初めての教授、また初めての副学長になりました大隅典子先生に、東北大学初代総長澤柳政太郎先生のお言葉～随時随所無不落～を引用された演題で、ご講演いただきました。

大隅先生は、東京医科歯科大学大学院で、哺乳類の発生生物学、顔面形成を全胚培養法を用いて研究をされ、東北大学に移られてからは、神経発生学にシフト、現在は自閉症の原因の研究をなさっておられ、父の加齢と自閉症との相関関係を研究中とのこと。女性である大隅先生がいかにして研究者としてやってこられたか、とても感銘を受けるお話しを数多く聞かせていただきました。例えば、商業主義的な瞬間的に出す論文より、長く引用してもらえる論文を書くことを考え、生き残っていくためには、自分にタグをつけて覚えてもらうように、同じような研究手法を使った一連の研究で何本も論文を固めて出していく。学会では必ず質問をする。そのためには、通路側マイクのそばに座る。またポスター発表では来てくれた方、コメントをしてくれた方の名札をよく見て、学会後にお礼状を送る。懇親会に出席をして積極的に名刺交換をするなどしてネットワークを作っていく。また女性が結婚した場合、結婚前の旧姓の論文、旧姓と結婚後の姓を併記した論文の著者名では残念なことにPubMed検索では、同一人物としては出てこない、著者として同一にとらえられないので、最初に論文を出すときにはよく考えるようにと学生には助言をしている、などいかにして大隅先生が著名になられたのか、その努力、パワフルさに圧倒されました。

副学長としての仕事としては広報、男女共同参画を担当されて、昨今医学部入学者の男女差が問題になったことから、これからは男女差別を考えていかなければならないと考えられたそうです。

東北大学では、澤柳政太郎初代総長が1913年に国立大学として日本で初めて女子学生を入学させ、現在の22代大野総長は、お母さまが高等女子師範の出身で物理学を教えていらっしやっただ方で、その大野総長の時代に副学長になったということは、女性が仕事をもつ

て働くことが当たりまえだと思っていただけのためではないかと。しかし理系学部が多い大学なので女性の教授は7パーセント未満と、86国立大学中75番目で、これからこの数を少しでも上げたいと欲している。ある理系の協会のキャリア志向のアンケートで、自ら研究室を主宰したいと思うのは女性で5割以下、男性では6割と違いが出ている。また女性研究者が少ない理由を問うと、男性女性とも両立は難しいからという答えが多いが、男性で多いのは男女の適性の差がある、研究職、技術職のイメージがよくないのではないかと答えてみられ、女性はロールモデルが少ない、男性優勢の意識があると答えている。このようにまだまだ男女の間に考え方の隔りがあるとのこと。小学生から大学まではリーダー志向における男女の意識差はないが、大学卒業後入社して2年目くらいから女性のリーダーになりたいという割合が落ちるといふ。それは多くの職場で女性に責任ある仕事を割り振らず女性の能力を認めて昇進させようという雰囲気がないからで、やってみてやりがいがないと思わされた環境でずっと挑戦し続ける人は少ない、それを見て男性が、女性自身が管理職を望まないとは判断するのは間違っているという新聞の書評記事を引用され、今後の仕事として人と人をつなげたり、若手を発掘したりエンカレッジすることを続けたい、いろいろな人生があつてよいと思ふし、ステレオタイプにとらわれないよつという事を常に思ひつ、澤柳政太郎の「随時随所無不楽」の言葉のよつに、楽しみながら無理のない処でやつていきたいと講演を締めくくられました。

女性として大変勇気づけられた大隅典子先生のご講演のあとはお楽しみの懇親会、お料理と恒例の同好会の発表を楽しみながらお開きとなりました